

後輩へネットリテラシーを教えよう～都心と田舎の学生が考える～

ーモラルの育成から協働学習の実践ー

羽衣学園中学校・高等学校 教諭 米田 謙三

kenzoo@cd5.so-net.ne.jp

キーワード：ICT活用、協働学習、モラル育成

1. はじめに

平成21年4月から施行された「青少年インターネット環境整備法」に基づき、青少年が安心・安全にインターネットを利用するための環境整備が始まった。また、急速に普及を始めたスマートフォンや新しいICT（情報通信技術）サービスにおいて、青少年が健全にICTを利活用できるように育成するため、青少年への指導に加え、保護者や教職員への「情報モラル教育」の啓発活動が重要視されているが、一方で、高校生が家庭や学校で如何に取り組むべきかという具体的な事例が少ないと考える。インターネットやスマホ（携帯電話）については、既に高いリテラシーを獲得している生徒もいる一方で、未だスマホを所持していない生徒もいる。インターネットや携帯電話・スマホが日常生活と学校での生活環境の間に、また地域によってギャップが深まってきていることは否定できない。今回はこれらのギャップを正すべく「社会と情報」の指導要領における「情報通信ネットワークとコミュニケーション」の単元の中で、事業者の講演や映像・Web教材をもとに、ルール・マナー・モラルという考え方を指導した。また、学んだことをもとに国内の中学生との交流学習へとつなげた。

2. 授業のねらい

2.1 概要

本校の情報のモラルの授業には二つのねらいがある。その一つは、論理的な思考力の育成のねらいであり、「情報の授業」を通して、話し合うという経験をより、段階的に「考え、まとめる、話す、見せる、伝える」などの技術を修練することである。たとえば具体的に「熟議」という事例では、通信事業者やサイトの運営事業者、情報モラルに携る団体等の参加によりキャリア教育としての側面も持ち合わせている。第二のねらいは、社会的に注目を浴びている携帯電話やインターネットをテーマとすることで、大人になる準備段階として、携帯電話やインターネットを安心して安全に使うために、高校生として情報モラルについて自ら深く考え、実践することで、将来のより良いインターネット利用環境の構築の一助とすることである。今年は、急速に普及しているスマートフォンについて、その問題点と対応について議論をした。議論を通じて日々進歩を続けるスマホに焦点をあて、通信の仕組み、電子メールやSNSの仕組みなど、情報通信ネットワークの仕組みの理解を基礎知識とした上で、社会生活の中でのネットワーク利用の利便性、新しい技術、活用の際の危険性についても学習した。

そしてその学んだことを国内・国外の交流へとつなげた。特に国内においては隠岐の中学生とビデオカメ

ラを利用して生活環境が全く異なる生徒が話し合う場を設け、自身のインターネットの使い方を客観的に理解することができるようにした。

2.2 成果目標

“成果目標”として以下の5項目を挙げた。

- 1) 高校生が中学生に提言するという責任感
ネットリテラシーの講座を受けても、生徒は他人ごとのように聞くだけで身につかない。中学生のネットリテラシーの育成を目標にすることで、生徒に中学生に教える責任感が生まれ、積極的に学ぶ姿勢を作る。
- 2) 教員の意識向上
インターネットについて、子どもは大人や教員より詳しいことがある。授業を通して、生徒のインターネット利用を話し合う中で教員が知ることで、教員が生徒から学ぶと共に、ネットリテラシーの重要性を理解することができる。
- 3) 都市部と田舎（島）にある学校で、生活環境が全く異なる生徒が話し合う場を設けることで、自身のインターネットの使い方を客観的に理解することができるようにする。
- 4) インターネットサービスを提供する企業から子どものインターネットの利用実態や、関連するトラブルについて学ぶことで、最新の動向を掴む。
- 5) 1人1人が意見を出しながら進めるワークショップ形式をとることで、生徒の主体的に自らのインターネットの利用の仕方を振り返るキッカケになると共に、発表を通して他者との使い方の違いを意識する。

3. 協働学習の実践

3.1 第1フェーズ

（導入）お互いの地域について講師より紹介（15分）

【大阪の生徒へ】隠岐（隠岐の島町）について紹介。

【隠岐の生徒へ】大阪（羽衣学園）について紹介。

3.2 第2フェーズ

（本題）インターネットについて考える

- 1) インターネットネットの使い方共有（10分）
 - ・生徒それぞれがポストイットにインターネットの使い方を書く。
- 2) 互いの意見を共有
 - ・大きな模造紙に1人1人ポストイットを張りながら使い方を共有する。
- 3) 企業からネットリテラシー啓発発表（30分）
 - ・携帯電話、スマートフォンに関わるトラブルや事件をもとに、リスクを避けるためのポイントを伝える。



写真1 会議の様子

・インターネットの特性を理解し、生徒の可能性を開くような使い方の事例を伝える。

3. 3 第3フェーズ

1) インターネットを使う上での問題点の洗い出し (20分)

- ・企業からの発表をもとにインターネットを使う上での問題点をポストイットに書き出す。
- ・教員は生徒が出した問題点を掘り下げていく。
- ・張り出した課題はグループごとにまとめて発表し、全体で共有する。

2) 問題点の解決方法を考える (60分)

- ・1) で書きだした問題点を模造紙に張り出し、グループピングする。
- ・グループごとに解決策を考え、ポストイットにまとめる。
- ・ポストイットにまとめた意見を取り出し、模造紙1枚にすべての意見をまとめる。

3. 4 第4フェーズ

1) インターネットを使うための提言の発表 (30分)

- ・インターネットとどう向き合う (利用する) のか、グループごとに発表する。
- ・提言は中学生に伝える内容で作成し、別の日に中学生へ発表する。

2) 振り返り

- ・解決策を考えつかなかった課題は各学校に持ち帰り、改めて考える。

4. 実践の工夫

4. 1 教員

- ・授業内容を隠岐、大阪、海外にいる教員が SNS の掲示板、メッセージ機能を活用して授業内容を検討、構築した。
- ・海外にいる教員との交流を Skype のテレビ電話で行った。

4. 2 生徒

- ・事前学習として、インターネットを利用して情報収集、分析、プレゼン実習を行った。
- ・ビデオカメラ (Skype) を利用して普段接することのできない遠隔地の人と共に学習することができた。
- ・ビデオカメラはテレビと同じく、ジェスチャーなど細かい表現は伝わらないので、カメラを通してできるだけ理解しやすい表現をするように心がけた。

5. 実践の成果

5. 1 ネットリテラシーの育成

- ・インターネットの利用の仕方を振り返り、トラブルに巻き込まれないためのポイントを抑え、自分たちだけが学ぶのではなく低学年の人たちに伝えるための提言を作成することで、未来のネットリテラシーの啓発に繋がった。

5. 2 仲間と協働・協調

- ・1人1人インターネットとの使い方が異なる中で、意見を出し合って低学年の人たちが正しくインターネットを使いこなせるよう提言をまとめあった。互いの意見を尊重し、提言を協働して進め、協調し



写真2 「まとめの発表」

て進めたため短い時間でまとめることができた。

・また、都心部 (大阪) と田舎部 (隠岐の島) という普段の生活では全く交わらない生徒が、インターネット

の使い方を発表する中で、互いの地域の特徴を認め合うことで、場所は違えど共に学ぼうとする姿勢から仲間意識ができた。

6. まとめ

ケータイ・インターネットの利活用について、子供たちが自らこの問題について議論したり意見を述べる機会は少なく、今までは、大人たちの立場から、子供達にとって良いと考えられる対策をしてきた。しかし、今の子どもたちは、生まれた時からインターネット環境が普及しており、われわれ大人とは違う感覚で、この情報化社会の環境をあたりまえのように生きる環境としている。むしろ子供たちの利用スキルのほうが大人よりも進んでいるのではないかということ、多くの方々が指摘している。大人の経験値からは推測できない子供たちのインターネット経験を、どのように整理すべきか、どのような方向を見出すべきか、大人にも子供にとっても大きな課題である。子供達が自分たちの未来を考えるためにも、情報化社会の今を考えることは大変重要なことであり、大人だけではなかなか想像できない情報化社会の未来も、子供達は彼らの利用実態から、意外と簡単に見いだせるのかもしれない。

一方、文科省が推奨する熟議というコミュニケーションスタイルは、大人のみならず子供においても有効なコミュニケーション手段であると考えられることから、子供が自らケータイ、インターネットについて熟考し、議論し、まとめるプロセスを共にすることによって、大人の発想にはない問題解決の方法を一緒に考えていけることを期待している。子供たちにとって、議論をふかめていくことが大きな啓発教育にもなると考える。また大人にも多くの気づき生まれるようにさらに活動を広げていきたいと考える。